

かやりたく思もそへてすむ宿の竹おほきかげは知らせかねつつ

忍傳書戀

世にもればとばかり思ふ一筆に人はことばを添へてつたへよ

忍戀

深からぬしるしにもあらぬせき返す涙の川に身をつくしぬる

筑波山

よそめには知られじものを筑波山よしや茂木の中のかよひ路

寄岡戀

書きやるも散らばいかにと水ぐきの岡の木に思ふ秋かせ

寄蛙戀

聲むせぶ井手のかはづは心あれやいはぬ色なる花のしたみづ

寄月忍戀

しるといふ枕もとらで寐ぬる夜の涙を月にみえむとやする

忍戀

なみだにや思ひまくべき言の葉にもらさじのみの心づよさも

忍涙戀

かぎりなき袖のみだれをいかがせむ涙の色の忍ぶもちすり

いはで物思ふ

まけてしも人につれなきほどや見むいはで物思ふ心づよさを

つつむおもひの

したにとも涙はしらし紫のねすりのころもつつむおもひの

寄原戀

わがおもひあだちの原のいつかさて心にこもるほどを知らせむ

寄河戀

たのむぞよなほ下くぐる鴉鳥のおきなか川のみちは絶えじを

寄滅盡戀



朽ちやらぬ袖ぞさながらみをつくし深き涙のなかに見えつつ

忍 戀

思ひあまりもらすともなき一言も涙にまさる色やみえなむ

寄風戀

心ともさそはぬ風のゆくへかはしひてちらさむ言の葉もなし

忍涙戀

袖の上にはらふばかりを思川なみだのほかに見えむこころを

忍 戀

ことに出でていはすば漏れじとばかりに涙にゆるすわが心哉

寄花忍戀

思ふ色のみゆともゆるせ時にあひて花ぞ涙のあまるばかりは

寄原戀

なほざりにいはぬ心や淺茅生の小野の篠原ふかきこころは

寄舟戀

潮みてばみさごゐる洲の舟だにもうち出でつべし忍びはてめや

忍 戀

思ふとて忍ばずもがな身にしらぬなき名も世にはなき習かは

名立戀

身よいかに戀ふる日多きならはしもしらで立つ名の田子の浦波

ひとかたに今をなき名になげくともしらぬ契の世世にありきや

波始戀

あちきなく誰れにまけてし我れならむいはでやむべき心づよさを

いひいでて知らせじとこそ思ひしかまづ頼まれぬわが心かな

行末のよるべも知らでなにしかも打出の濱のおきつしら波

寄風聞戀

いひよらむわれに誠のたよりあらば音する風に聞かせそめても



聞聲戀

聞けばとて遠山彦はかひもあらじわがいふ事の答ならずば

待聞戀

思ひ入るそのみるめもいかにぞと聞くにゆかしき波の上哉

聞音戀

わりなしや月なき空のこたへのみこすのひまもる面影にみて

被慰人戀

いかにせし間はすがたりの行方とて忘れぬ人のわれをとふらむ

寄海遠戀

藻鹽草あまのすさみのそれさへぞかきおきながら便だになき

言出戀

いかにともきくべき人はよそにして知らせじとせし世にやもれなむ  
いかさまに哀もうさも今よりの言の葉つきす人にきかれむ

寄海戀

いづくとかいなみの海の波の間に千重にかくるる面影にみむ

かつみる人に

見しもそのかつみる人に思寐のゆめにまさらぬ夢をこそまで

纒見戀

たが春にあくまでか見し山ざくら霞の間よりそふおもひかな

寄月戀

みてもなほ面影のみの夕月夜おぼつかなきやおもひなるらむ

見戀

散るをのみ思なるべき花にまづをらぬ歎のそふもわりなし

寄雲見戀

なにとこのみをうら島に立つ雲のみてはくやしき思そふらむ

寄池戀



さもこそはうきねの池にとる草の鏡のかげにみごもりにして  
不逢戀

もがみ川月日はただにゆく舟のいなとばかりに變る瀬もなし  
誠には契なき世に生れあひて人をも身をもたれとかはしる  
われにこそつれなき色の常磐山よその紅葉はいかがとぞ思ふ  
戀といふはこれぞ世の常身に限る思なりともいかでしてまし  
箒木よそめばかりに道絶えてひと夜ふせやの影もしられず  
命にはまかせはつべき今更に思ひたえむもあさきころを

寄湯戀

波荒きなごりよいかに汐干がたいふかひなくて碎くころを

詞和不逢戀

あげ卷のよりあふからに恨みわびぬ隔なきとはかかる契を

難逢戀

ありとみて頼む心はたがならぬ身をぞなげきの箒木のかげ

寄嶺戀

人ゆゑに心をしをるほどばかり嶺のあらしもまつにやはふく

不逢戀

物思ふ人はならはでつれなきの心はおなじ我がいのちかな

寄秋河戀

一度のあふ瀬にかへて天の川星に生まれむ名にだにもたて

寄浦戀

波こゆる音につけても松山のまつの浦風われにはげしき

寄絲戀

わが思ふかたにはよらで片絲のあはじとするもさぞな苦しき

寄沼戀

かくれぬのあやめの枕をりにあへばそれも一夜の契やはなき



不逢戀

あぢきなく夢にだにとは頼まずよ夜の衣をおもひかへして

戀 關

逢坂や夢にもさねむさねかづらくる夜を人にせきなとどめそ

寄 關 戀

ひた道にたのむとならば關守もうちねぬ夜半をまづ許さなむ

寄 關 戀

大永六年  
内裏御屏風和歌

みはてぬを思へばかなし關守のしらぬ夢路の末もとほらで

寄 木 戀

逢ひ見ねば又ともいはず二本のすぎしを忍ぶおもひでもがな

寄 川 戀

いさや川涙のみかさまさるらむ拂はぬちりはとこの山とて

寄 月 戀

かたらはぬ月の面影いかさまに枕ならべて侘びつつもねむ

寄 瀧 戀

朽ちずとも袖は涙のたぎつ川せき入れておとす程やなからむ  
戀に身も世をへておつるみな上はしらすよいつの袖の瀧つせ

寄 山 戀

行末はいもせといはむ山の名も今やせきあへぬ瀧つところに

寄 河 戀

とへかしたもの思ふ袖のおきふしに川ぞひ柳たえむものは

寄 野 占 戀

しらぬ野もわが心なるあしうらのあはぬ道にはふみも違へじ

寄 鏡 戀

ます鏡くもるにつけて物思ふ涙のほどをさだかにぞ見る

戀 灯

大永六年  
内裏御屏風和歌



とりいでて文をぞみつるいとせめて戀しき時のともし火の本

度度返事

書きやるにひまやはありし昨日よりけふ珍しき文もわりなし

通書戀

哀ともさすが千鳥の跡やみむ濱のまさごの數もつもらば

見偽書慰戀

手にとりて思ふやいかに村鳥の跡もとどめぬものと見ながら

返書戀

いかがみし夜の衣のそれならでかへすや夢とおもふ玉づさ

寄思草戀

心とめてみよや尾花が下草もなべてにもあらぬ露のみだれを

寄玉戀

瀧つせに玉ちるほどの思をも誰れなくさめてそではほさまし

寄宿木戀

いつまでか涙の袖にやどり木のはては朽木のいろにこそみめ

寄衣戀

唐衣なみだのほどにくれなるのこそめは色のかぎりこそあれ

寄名所戀

波ならぬうきねをいかが須磨の浦やまたなくおもふ夜の涙に

寄海人戀

海人もやはわがなきぬらす敷妙の袖しの浦のうきねをばせじ

寄舟戀

知らせばや人をうきねの泊舟ひとり袖こす波の間もがな

寄江戀

くらべてはなに難波江の身をつくしおのが思は沖をふかめて

寄鏡戀



かばかりに思ふをうつす心あれな人を鏡のおなじためしに

尋戀

いかにとはむ花の心もかくれがの芳野はあさき山路ならじを

寄嶋戀

しらじかしよもぎが島のまぼろしも我れをばよその人の行方を

尋在所戀

世の外の玉のありかも思ふにはそことしるべのなきにやはあらぬ

尋戀

かけてしも思はぬふしよ竹しげきかげを契に尋ねよる身は

またきても逢ふせはなしや面影もなほみがくれの中川のみづ

遠尋戀

わけつくす末野に近き山風に聲ほのめかすまつむしぞ鳴く

憑媒戀

思ふにもにるべくもあらぬ人傳にわが言の葉や我れとしもなし

不憑戀

思へただこの世の契とにかくにたが咎ならすいふかひもなし

祈戀

祈りこしいく年並かいたづらに神のいがきもこえむとすらむ

さもこそは頼むかたとて祈るとも神も忍ばぬ中のくるしき

たちかへり思ふ人にもしられじの戀路を神にはこぶあゆみは

初祈請戀

思ひあまり今はた神にたのみてや引くしめ繩の靡くをもみむ

祈難逢戀

人ならば神もねたしやつれもなき方によるらむ心みえぬる

寄杜戀

なげきとも人や聞かむさばかりに神はことわる森の言の葉



寄川戀

ひと方の思になさでみそぎ川など戀ひせじの身をたのむらむ

寄塔通戀

神葉のかげをしるべにとめてこし神のいそぎは人もへだてじ

寄名所戀

木幡川こはたのみある戀路かななき名すすしき神にまかせて

隔一夜戀

明日とまた契りおきても一夜だにとはぬはつらき習とを知れ

待戀

限あればたへて待つべきつれなさも有明の月に思ひまけぬる

あぢきなく思ひかへして思ふぞよいつの夕を人にまたれむ

待つにたへぬ一夜二夜よ月日へてあひ見るだにも哀ある世に

毎夕待戀

あぢきなし今日ばかりはと待つ暮のうきならはしはありもあらずも

寄雲戀

をりしもあれわが夕暮の空の雲おもひもみちてところせきなる

寄鳥戀

ともなひてねにゆく鳥は雨風のゆふべにさはる契ともみず

不堪待戀

たのめしに更けゆく程の戀しさはわりなき物のそふおもひ哉

寄月戀

雲霧にかくるる月の時のまも夜がれになして待つに久しき

寄雨戀

あぢきなく雨にはとはぬかごとをも誠になして慰みぞせむ

寄風戀

とはざらば人ぞはげしき風ならむ松にはきかぬ夕ぐれの空



寄蛛戀

このくれを頼むもいかにささがにの絲くりかへす風のけしきに

寄秋鐘戀

たのめてし空を涙にながむれば入相の鐘もきりにむせびて

戀聲

さりともと心ながさはこぬ暮をあかつきのかねに驚かされて

寄鐘戀

いたづらに待つ夜ふけぬと驚かす鐘はおもはぬ音づれにして

寄里待戀

いたづらにまつ人いかに吳竹の伏見の里はよをへだてつつ

寄秋枕戀

待ちわびて月にぞかはす小夜枕面影のみのそふをたのみに

寄衣戀

から衣夢はさりとも待ちぞみむとはじと人におもひかへして

寄里待戀

暮ごとをこの里人にしられじとこころをとるも待つにくるしき

待空戀

あさはかに一夜二夜をうらむなよ年の三年も待つはならひぞ  
あかでもいかに別るる道ならむ待つ夜も明くる嶺のよこ雲  
明くるまでなかな空音の鳥もあれと思ひ返すぞ人にわりなき  
明けぬめり待ちふけし夜の今はとてねらればさすが夢も見ましを

寄野戀

宮城野や風なき花もちる露のはかなやたれを待つことにせむ

寄筵戀

よなよなの床のさむしろ塵ならぬ涙のほどやはらひきぬらむ

寄床戀



なげきあかしひとりなきある朝床によるの涙の跡もわりなき

寄橋戀

歎きあかす枕ばかりやうき橋の夢のわたりをかけはなれても

僞戀

とにかくにこの世になにを誠とも定めぬものを人はうらみじ  
思へなほわれはわれにて頼みこし人にひとたび見えしまことを  
面影の月やはとはぬまてといひてこぬ人しもぞ僞もなき

寄鳥僞戀

春の野にたのめおきても跡もなし尾花に鳴きしもすの草ぐき

寄雨戀

わりなしや晴間もまたぬ雨にきてかばかりぬるる袖のやつれは

逢戀

獨寐の夢はなかなかならひこし契ともなき小夜の手まくら

初逢戀

一度は思ふにまくるつれなきの憂きこそならひ末もたのまじ  
今更にいひ出でがたき言の葉よ忍ぶにはあらぬ小夜の手枕  
小夜枕又もかはさぬ夢ならば身はならはしのおもひもぞ添ふ

逢戀

唐衣かへさでこゆる面影は誰が夢ならしわが身ならめや

初逢戀

行末のたのみがたさをいひ出でてつれなかりしにかへる恨よ

寄月逢戀

から衣こよひなみだのへだてなき月は空にてかげぞまばゆき

寄木逢戀

あひみても後に又みばいかならむよそに心のふたもとのすぎ

旅宿逢戀



あさはかに忘るな人も草枕ねぬ夜に夢はみゆるものかは  
はかなしや一夜の宿の枕とて草ひき結ぶ露のちぎりは

寄花逢戀

夢ならば残らじ袖のうつり香をいかにさだめむ花の手まくら

初逢戀

ましてしばし鳥だになかで明くる夜の蓬のまろね露もわりなし

寄車戀

小車のわりなき道にあひみてはなにか難波のうらみ残らむ

逢夢戀

またもみむ面影のこせ深きよのくらぶの山の夢のやどりに  
夢とても何かはるべき明けゆけば現もおなじあふ夜ならずや

寄花戀

あだなるをくらべば夢もいかならむ花の手枕ひと夜ばかりは

祈逢戀

祈りこしその神かけて今よりや人にちかふも空に知るらむ

馴戀

おきふしを思ふどちらにてすごす身のはてはてぬべき心ともなし

寄草馴戀

今はさは蓬にまじるあさはかに心ともなきこころをも見む

寄繪戀

なれてだにうちみじろがぬつれなさを繪にかく人になすもわりなし

契違約戀

なほざりに頼めてとはぬゆふべをも疑ふ方にそふうらみかな

寄月戀

夜がれなく今より影をみかづきの薄きも深きちぎりをぞ思ふ

寄山契戀



思へなほ常磐の山にさく花のいはではたのむ色もみえじを

寄月契戀

あかず思ふ月はいくよの契ぞとよそになしてもいひ聞かすらむ

契戀

あすしらぬ世のことわりのあぢきなく頼むにつけて添ふ思哉

夢中契戀

なほぞうき人は急がぬ道ながら心と夢のかへるさのそら

別戀

あぢきなく恨みてかへる心より吹きけるものを葛のうらかせ  
うつり香を身にそふものとおきいづる袖に悲しき道芝のつゆ

寄鳥戀

あけぬ夜をつげつる鳥の空なきや人は涙のかへるさの袖

惜別戀

大永六年  
内裏御屏風和歌

思へどもかぎりある夜の東雲を人にしたはむことの葉もなし

曉別戀

虚寐ぞといひまぎらはさむ程もなしゆふつけ鳥に鐘もきくべく

留形見戀

かはる世の行方や人に残るらむこれなむそれと思ふかたみに

寄月戀

さそへただ心の行方しばしだに月にまかせて人にはるけむ

寄河戀

わかれ路よたどるもさぞなあくた川あくる夜くらき露の光を

深夜歸戀

たちかへりまたもとふやと残る夜の今のうつつを夢に頼まむ  
かへるさのわれまどはする月だにも夜深き道にゆく空もなき

寄筆別戀



なほざりに人をぞ思ふ言の葉に天とぶ雁はゆくかたもなし

後朝戀

うつり香も誰が袖とてか残るらむ身はきえぬべきけさの思に  
おもかげ

今朝はなほ面影にそふ戀しさやうつつながらの夢をみつらむ

後朝戀

きぬぎぬにたへて哀のわれや又つれなき方にみえむとすらむ  
むつごとにつきぬ思を書きやるも夢のうちなる今朝の玉づさ  
われに人うかるる玉ものこさじをこの朝露の袖のなかなる  
道芝にわけこし露もうつり香も我がきぬぎぬの物となりぬる

後朝恨戀

のこる夜をわが獨寐にあかしてもとはぬにまさる思やはなき

歸無書戀

今朝の間にとはぬやいかに夢うつつ人に定めむ契ならじを

戀歌下

欲顯戀

いつのまに心許して關守のうちねぬ夜半を行きてとふらむ

顯戀

袖にこそおくべき露の玉章をわが心とや世にちらすらむ  
空にみよ月のくまをば厭はでやたちかくれにし人に知られじ

寄獸顯戀

しばしだに影も頼みしうつば木の物にくまなき世をいかがせむ

寄書戀

心せよ袖にゆるしておく文のおちて涙にまぎれやはする

寄鹽木戀



こりすまのあまの藻鹽木一方に思ひけつべきおもひなりしを

寄名所戀

いかにしていひもはるけむ名取川みは埋木の世世の逢ふせに

稀戀

なほぞ思ふとしのわたりに立ちまさるこの河波を袖にかけても  
あひ見てもそれとはなしや月の夜の星を數ふる中のちぎりは

寄月稀戀

秋かけていひしは月の有明も木の葉ふりしく空にふけつつ

稀戀

あちきなやよその夜がれと思はずば疎くてとふも頼みこそせめ

稀問戀

おしあてに疑ふ方の恨をもしらずや我れにたえ間おくらむ

寄濱戀

あちきなく稀にきてとも頼まれず身はうど濱のあまの羽衣  
いまはそのたぐひも悲しうど濱の稀にもきてしあまの羽衣

寄門戀

色かはるちぎりもさぞとわが門の淺茅が原はうらみやらなむ

寄花變戀

せめてなほよそに散らさぬよしもがな言葉の花の色變るまで

寄月變戀

われにうき人の心のくまよりや月は有明のかげを見すらむ

寄松戀

大水六年  
内裏御屏風和歌

かはらじと猶たのめとや松山のあたら波をばみす知らずして

寄野戀

とはすとも野となる里に鳴く鳥のうつらむ方をわれに聞かすな

逢不逢戀



いかにして語りあはせむさだかなる現の夢はひとりやはみし  
かひなしや見し夜の儘の月みても結び捨てたる夢はゆめにて  
絶えにけるあふ瀬よいかに涙川まさるみかさを袖にせきても  
おなじよに本の身ならぬ身のうさよたが習はざる思なるらむ  
しのすすき忍ぶかたにはいつなりて逢坂山にあさ風のふく  
年もへぬこの世ながらの人をしも古き枕にしき忍びつつ  
ひとたびは渡る瀬もみし阿武隈にたが心なるきりのへだてぞ

寄床戀

はらひかね袖よりあまる床の露今はひとりも寐むかたぞなき

寄都鳥戀

おなじよにありやなしやも都鳥とはれば人になぐさみてまし

寄月疑戀

我れならでわけこし跡も木がらしの宿とくまなき月やうらみむ

厭 戀

世をいとふ心にまよふ野も山も人をこひぢのうへに知りぬる

厭賤戀

見もわかば心のきはをへだつなよ思は人の下ならぬ身を

被厭戀

人にこそなぎたる朝のわれならめ煙もきりもこころひとつに  
見すやいかに垣根に拂ふ草かづら厭ふにはゆる物にやはあらぬ

寄木厭戀

よそへてもうき世の中は厭はなむたえて櫻のわれやなになる

不及戀

つたへても聞くにも哀深き窓に思ひあがれる人のこたへぞ

恥身戀

なにはがた何に残れる契とてあしからじとは人もみえけむ



戀不依人

われのみ  
の思の色に  
花がたみ  
めならふ  
人の數な  
らずとも

隱戀

夢にても  
あらぬ枕  
のきりぎ  
りす壁の  
なかにや  
明かしは  
てけむ

寄爐火戀

またいか  
にねどこ  
ろかへて  
爐火のは  
ひかくれ  
ぬる人の  
行方は

來不留戀

かへるさ  
のこは何  
故といひ  
おかばた  
ちよる程  
をことわ  
りやせむ

あらはれ  
ばそれを  
うらみと  
大淀の松  
によせて  
もかへる  
波かな

夜不留戀

かぎりな  
き思や月  
に残しけ  
む山の端  
ちかきや  
どのかへ  
るさ

寄戸戀

たちよれ  
ど心の中  
のとざし  
をばいか  
にかため  
て行く道  
もなき

うしやそ  
の草のと  
ざしにさ  
はるとは  
たが中道  
にとひ捨  
てて行く

寄春戀

春の色に  
にははし  
そめてい  
まよりや  
霞のころ  
も花にみ  
てまし

春戀

なびくら  
むほどだ  
にもなき  
若草に露  
はいつよ  
り思ひか  
けけむ

花に人散  
りなむ後  
もかはら  
ずば春を  
ちぎりに  
うらみざ  
らまし

春夜戀

人よいか  
に春とて  
月のかす  
む夜もあ  
らじと見  
るにうき  
涙かな

暮春戀

馴れこし  
は更に夢  
なる春も  
なしあだ  
に契りて  
誰れをう  
らみむ

夏戀

くらべて  
は人にや  
深き時鳥  
またるる  
うさもし  
たふなご  
りも

夏夜戀



蚊遣火はけぶりもあらしわれを人やどにふすぶる程に比べば

秋戀

物思ふ心ゆるすな雲井とぶかりのなみだも萩の上のつゆ

寄秋河戀

くれなるに水くくるらむ秋もうし立田川をぞ袖にながして

晝戀

わりなしやひるねの床にみし夢もまばゆきかたに向ふ日影は

寄橋戀

いかにみむ夢の浮橋それだにもねられぬ夜半は絶間おきける

雨中戀

月花はまざるる方もありつべし戀のつまなる雨のうちかな

寄屋戀

涙より雨そそぎしてあづまやのほかなきものと袖はぬれけり

寄雨戀

とひきてもただにほどふる雨そそぎうちはら袖を涙ともしれ

幼戀

うきふしの色になみえそ吳竹の世をへぬ程をわれはたのまむ

遠戀

朝夕に思ふも遠しあふくまの霧のへだてはありもあらずも

寄雨戀

心には思ひたえぬもかひなしや日ごろの雨の山路へだてて

隔海路戀

よるべありとわれやはきかぬ荒磯の外ゆく波の隔てはつとも

いかにいはむ波路もたえて八百日ゆく濱の真砂のまさる限を

伏見里

人ぞなほはるけき程にへだてける伏見の里の夢のかよひち



久 戀

知らず身をなき世になしてとはざらば永らへけるといふよしもがな

寄樵夫戀

知らずわが涙にやみむ斧の柄の朽ちし所を袖のうへとは

寄河戀

こととへな知らず幾世の水上也涙の川のほかにやはあらぬ

寄煙戀

とことのはの思よいつをはてならむ富士の煙はたたずなりとも

經年戀

つれもなき色を重ねて楨の葉に苦むす山はとしぞへにける

さりともと人におくりし年月のはては頼まむゆくすゑもなし

契經年戀

忘るらむたのめ置きても言の葉はありし物から月日へにける

戀居所

程へても忘れぬ道の露けさはわが身にしをるよもぎふのやど

隱名切戀

袖ぬるるたぐひのみかは數ならぬ身に蚤人のなのりそもうし

寄蟲切戀

みし夢も胡蝶の夢もなにかいはむわが思寐の我が身なりける

埋 戀

日にそへてしぐるる色の木の葉さへ千しほと見るに限こそあれ

日にそへて戀のみだれぞはて知らぬわが玉の緒の絶えしもの故

悔 戀

知らざりき花田の帯の末つひにからき思にうつるこころは

旅宿逢戀

思はずや故郷人の面影にまぎるる夢はみてもいかがと



羈中戀

草枕都に人を忘れねどみる夢ならぬゆめもわりなき  
旅にして海人のすさみにかりそめのみるめといはば淺き契を

寄湊戀

浪枕人にそふべき夢もがなさても戀するかげのみなとに

忘戀

よそにても思ひいづやと慰めて身のならばしのうきちぎり哉  
われぞうき昨日はけふに變る世を忘れて人におどろかれぬる  
かきやりしわが一筆も残るらむそをだにみても思ひ出でてよ  
草の名はかひなきものよきし方に歸るもあれな住の江のなみ  
慕ふかたに今にはあらで何をかはたよりになして驚かさまし

寄江戀

忘草おふるもしらず住の江やまつとばかりを何たのむらむ

被忘戀

おなじ世にふるの神杉すぎこしをよしや忘れね我れぞつれなき

難忘戀

いかに見てなほあかざりし夕顔の露の行方をおもひおきけむ  
面影もなげきもわきていつの時いつのをりとか人にしのばむ

思

ためしあればいふかひもなし我れのみと思にみえむふじの煙を

片思

おなじ野の尾花はなにを思草いろなるつゆもよそにみだれて  
みだれてはただわれのみの思草人はここに露もかけじを  
われ故の心にかよへ物おもひなくてすぐさむこの世ならじを

恨

ひとたびの情もさすがみし人を恨むるかたに忘れもぞする



思へかし恨をおへるはてはてのやすからぬ身は己がためぞと  
はかなしやわが身をたのむ中にして人を恨むる節もありけむ  
われのみはいはでの恨いかにして忘るる後の世にもあはまし

寄夜戀

いたづらに逢ふともみえぬ夢路こそかへす衣の恨なりけれ

遠戀

いづかたかなほぬれまさる獨寐の袖にもこゆる浪路へだてて

人傳恨戀

いひよりし程こそうとき中ならめ今のうらみの人づてはうし  
思ひそめしほどはたよりも求めしか今の恨をよそにいへとや

恨心中戀

ことわらむ心とも見ぬつらさまでまさる恨をたへしのびつつ

増恨戀

磯づたひ波のいくへをへだてても思ふかたなき浦風もなし

寄浦戀

なほざりに波におもふな時の間もほさぬそでしの恨ある身は

伏見里

うき中にわが世へがたき恨をも伏見のささに思ひおけとや

寄月恨戀

はかなくや共にみし夜の思出もあればあるよを月にかこたむ  
なぐさめとそふ面影の月をだにまだ見もはてすうき涙かな

寄門戀

月ぞとふ門さしこもるこのくれを恨もはてぬなぐさめもなし

寄花恨戀

あだなりと思ふやいづれ花の上につるふ色を人にうらみて  
わが中に思ひかけきや花さそふ風のゆくへのうらみありとも



寄絲恨戀

いかさまにうつり變らむ白絲のもとみし色はいふかひもなし

恨絶戀

恨みわび今はたえねと思ひこしわが玉の緒を人にかけてつ  
思ふゆゑうらみも深きひとふしを今は忘れぬかたみとやせむ

恨絶戀

大永六年  
内裏御屏風和歌

あはずばと思ひながらも片絲のたえむとまでは恨みざりしを

伏見里

重田

うき中にわが世へがたき恨をも伏見の里に思ひおけとや

寄葛戀

後はいさ風のくすはの草の原ふかきうらみのいまはとはなむ

寄月絶戀

思ひいでて今かひなしや諸共にみてこそ月のあかざりし夜を

寄催馬樂戀

かはるらむ道かとしれば待乳山わがこまうきもさすがなりけり  
いかにか我が名もたてむ夢にだにくめのさら山道はたえじを



後柏原 柏玉和歌集 第八卷

雑歌

天象

ここにうつす緑の色やすみのかげすめるを天津空とみすらむ

曉

心にぞあかつき月はすみにける空にまよへる雲もかすまで  
しばしなほにしなる月の深き夜は山の端とほしあかつきの空  
心すむ今ぞさまさまおもひねの夢はうつつのあかつきのそら

曉寐覺

残る夜を有明の月にまたやみむ跡なきゆめのまくらかはらで

寐覺鶏

いたづらにぬる夜の夢をいさめてやここに鳴きふる鶏のこゑ

曉寐覺

思ひ入る寐覺の山もたのまれず聞けばおくなき鐘のひびきに

朝

道をきく友やなからむうちむれて朝にいづる人はありとも

曙雲

面影に花もわかれずうば玉の夜は白雲のあけぼののやま

雲

ちりひちの山より出でてひとすちの雲の行方や空にみつらむ  
朝みどり水なき空にわき出でてひとすちみえし雲ぞみちぬる

滄海雲低

ながめやる海のはてなる山ぞなきうかべる雲もはなれ小嶋に



海邊眺望

山もあれや浦風よわる夕波のしろきをみれば雲ぞかかれる  
海ごしの山もつづかぬ遠嶋のこすゑの夕日いるかげもなし

夕陽映島

夕づく日のこらぬ色やあへの山鶉のすむ石のうへにみゆらむ  
すみよしや松のこなたに暮るる日をはるかにのこす淡路島山  
しほみちくらし

見るがうちに汐みちくらし山遠き夕日の浪のはれてくもれる

薄暮望

木の葉かは夕日のひかりむらむらに色こき雲も山はそめけり

薄暮遠望

空にゆく雲はそなたにまづくれて山よりいづる鐘ぞまたるる

薄暮松風

吹きいづる風こそくもれ夕づく日さす影よわるをかのへの松

木

花にさき紅葉に染めぬ色ながら松をうる木にあかぬいろかな

松葉不失

下紅葉ちりもや草にまぎるらむおなじみどりの松の木ぶかさ

松

朝な夕なみちくるしほにそなれ木の松葉は波に玉藻おきつも

松歴年

松にのみいくせの年をわすれ草岸に生ふてふたねはありとも

杜樹

いづくにも木ぶかきかげは松杉の常磐の杜をよそにやはみる

雑植物

藤浪の波にぞおもふ春日山かれたる木木も春にあふべく



木

玉椿はると秋との八千世をも花にぞちぎる紅葉をばみし  
いかにもむ人の心のふたおもてこの手がしはの此の頃の世を  
さまさまの形なりけりなほき木にまがれる枝はよしや世の中  
竹

今さらに生ひいつるかげは若竹のおのが世世なる物とこそみれ

窓 竹

竹くらき窓にぞおほふ誰が宿に文のなにおふ草も生ひけむ

籬 竹

かげくらしきいささむら竹木にもあらぬ草の籬に定めてぞみる

竹風如雨

村雨もよそにはすぐす竹の葉に吹きやむほどの風にまかせて

窓 竹

雨のおと雪のこゑにも夏冬のかげこそあかねまどのくれたけ

山館竹

世の中のうきふし知らでかしこくも竹の林にすめる山かな

草

今はみの心をたねとあかつきの目ざまし草のおいぞちかづく

蓬

すむやいかに松の木だかくなるかげを軒にあらそふ蓬生の宿

前

霜にかれ露にめぐむも庭草のただ目のまへにむかふものかな

路 苔

苔のうへに夜のひかりや思ふらむ松のほかげもしめる山路に

幽徑苔

山ふかみかくても残る道もあれや苔にかけつぐ橋のたえまは



つもれども木の葉は風に跡みえてはらはぬ苔の山路たえつつ

浪洗石苔

山水にたが苔衣あらふらむいはほの中をすめるかげにて

巖頭苔

さざれ石のいはほの苔の行末はおのがみどりを松にゆづらむ

名所鶴

妹に戀ひたがこころとかなくたづも妻こひわたる和歌の松原

浦鶴

あま人もうちいでけりな浦とほく汐干待ち得てたづあさる聲

蘆間鶴

子を思ふつるの毛衣あしはらのうすきやわぶる夜の浦かせ

河邊鳥

ここにかも渡すかいかに宇治川の洲崎にたてるかささぎの橋

江雨鷺飛

鷺のとぶよそめは雪のくるる江に河音まさる雨のはげしさ  
墨がきのただ一筆の外なれや雨おつる江をわたるしらさぎ

白

冬がれのあしまをひろみたつ鷺や水にもたまる雪をみすらむ

鴉

霧のうちに思ひの外にみえつるや鴉なくはじの立枝なるらむ  
野邊の色は秋風たちてなく鴉の世にとはれぬと心づからを

竹裏雀

むら雀わが家鳩のかげしむる竹をあらそふゆふぐれのそら

ゆきかふ鳥の

さまざまに行きかふ鳥の水におち山にさかゆく暮のさびしさ

鳥



うらやまし鳥すらむばら枳殻のさかしき世にはすまむともせず

馬

千里をもゆくより名にや龍の馬雲にもものぼるみちは知るらむ

獸

あげまきのわぎにしたがふ馬牛もあした夕のみちはしるらむ

山深み世のうきことに聞きかへて猿なく峯はさぞなすみよき

牛

かしこしな水のにごりの世をうしとひきかへすなは人に残りて

いにしへの春にかへらぬ世をうしと花の林のかけやこふらむ

蛛

ほどほどに見るにはかなし蛛のいのそれにもかかる蟲の命よ

蟲

かけすてぬ軒の蛛のい冬の日にあたたかなるをくべき時とや

もろ人のたちぬふ絹の上にしも民のかふこのまゆひらくなり  
にしき

文にだにあひ思ふほどはしられじを織るや錦の色にみえぬる

硯

もしほ草かきとどむべきかひもなし硯の水のふかきこころを

畫

一筆のすみがきにしも山水のをちこち見せてたくむみちかな

松風入琴

おなじ音にかきなす琴のたゆむまをわれにいさめて松風ぞ吹く

かきなすもおなじしらべに哀てふことをあまたの松風のこゑ

橋

行末はただに過ぎじと橋柱身をたつる道やしるしおきけむ

橋 雨



ぬれにけりあしとき雨におくれじとゆけば危きまへのたな橋

夜 雨

みもはてぬ夢の名残のむかしをも語りいでたる雨のうちかな

閑

いかにぞと草のいほりの雨の夜を板屋にあらぬ軒端にぞきく

樵路雨

山遠くはこぶ薪にふりくるも雨はあしときみちにおくれて

ぬれてゆく山路のかへさわれよりもほさむ爪木を思ふ雨かな

樵 夫

眞柴とるやまの山人うきわざも身をわすれては何かくるしき

袖の色はみしこともあらぬ涙にもまた斧の柄の隈こそあれ

柚川筏

いかだしも宮木くだして柚川の水のひびきにやまびこの聲

柚 山

おくふかきやまの山びこ聲聲にひくや柚木のいく木ともなし

雑 聲

人かへる夕山かせもさわぎたつちりのうちなる市のこゑこゑ

瀧

雲におち木の間をわくる瀧の糸も同じ筋にやむすばほるらむ

すぢまよふ岩根の瀧はなびきそふ松にかかれる糸かとぞみる

瀧水亂絲

山風のはげしきほどや瀧の糸のたえぬ物からむすばほるらむ

瀧の糸はくるてふし（ヤイ）らぬ亂れてもおなじすぢなる山風ぞ吹く

澗戸雲鎖

玉かつらたえぬ物はとゐる雲のさも谷せばみ住居をぞ思ふ

暮れぬとて歸る雲をやわくならむ蔽ふとみるも谷の戸ぼそに



すむ身こそ道はなからめ谷の戸に出で入る雲をあるじとやせむ

谷松年久

おろかなる谷のこころを程として年にかはらぬ松のここの葉  
谷ふかみふた葉のほどや埋木の松は木だかくあらはれぞゆく

澗松

谷ふかき水のひびきもうかぶらむうへに波こす松かせのこゑ

遣水

山川のしらぬながれも御かは水こころをやりてすめる影かな

清

かきはらふ庭のやり水おのづから残るあくたは流れてぞゆく

山影寫水

誰がいひし三つの影とか水の上に山も浮草のところせきまで

河水流清

いすす河下つ岩根による波もうごきなき影やみえてのどけき

長河似帶

山とほくおび引きすててゆく雁のおなじつらなる末のかは水

晴後遠水

浪間より朝日さしきて名残なき夜のうしほの遠方のそら

渡

人渡す小舟ひまなき水の上のあはれこの世のわざとやはみむ

渡舟

世にひろき道をしらなむ河舟の人わたすなるゆき來ばかりを

岸頭待舟

さしわたる舟まつほどの川風は岸うつ波をそでにかくとも  
いそぐらむ舟出もいかがこの岸のいさりの光苔あをきかけ

漁舟火



夕なぎのうらの波風かはらじを夜舟たゆたふいさり火のかけ

遠帆連浪

かへるさやおのがうらうら見もわかむおなじ浪路の沖つ舟人  
行末は空とぶ鳥やおきつ舟なみのいくへに雲もたちきて

漁舟來波

しづかにてひとり釣する波ならで蟹の世わたる舟路くるしも

釣 漁

たれかする釣の臺の上にても世にはみえじの身をやおくらむ

釣 舟

波風にやすげなき身のうれへをば見てだに悲しあまの釣舟

深

五百重波千尋にいふもはかりしる海人は心のかぎりやはある

蘆隔漁火

吹きしをる風の末葉もいさり焼くほかげみじかきあしの村立

海邊松

水底にかづくにはあらぬ海松の波にうかべるあまのはしだて

名所松

ゆきてみむ心ある蟹のすさみまで思ふもゆかし松が浦しま

海橋立

蟹のかるみるめにはあらぬ海松の波にうかべるあまの橋立

鹽屋煙

波のうへになびきやはてむ須磨の浦鹽やくけぶり山風ぞ吹く  
すまの浦やしほやく煙よそにても侘ぶとこたふる心をぞみる  
山かけてふすぶる柴ももしほやく煙あらそふ須磨のうらかせ

關 屋

波のうへに心をよするやすらひをきよみが關のもる人にせむ



關

足柄やただ雲霧の八重山ぞ道なきせきのとざしなりける

關路行客

ゆく人も木がくれ深き逢坂はあふともなしやおなじ關路に

高

雪とみるも月よりうへのひかりかは秋をたかねのふじの芝山

山

いく藥そらにつたへし煙よりよもぎが嶋もふじのしばやま

筑波山

思ひ入るはてやなげきの筑波山はやましげやま道はありとも

よそめには知られじ物を筑波山よしやしげきの中のかよひぢ

瀧水

ながれてのこころもみゆや音羽川たぎつ岩根の水ぐきのあと

布引の瀧

雲霧の空につつみてしらぎぬのはたはりせばき布引のたき

河水流清

水無瀬川ながれて末の世にも猶すめるをあふぐ跡のかしこさ

川

松浦川すめるやいづくあまならば舟をわれとも答へこそせめ

地儀

志賀の浦やひらの山風みわたせば潮ならぬ波ぞ沖にみちくる

暮林鳥宿

いかにしる鳥の心ぞ世にとほき山はやしにといそぐゆふべは

むら鳥のおくるる空やいそぐらむゆふべの鐘も木がくれの聲

聽

おもふこと今日もむなしく暮れぬとや入相の鐘をおくる山風



晚鐘

鐘の音にけふとくらしして飛鳥風ただいたづらの身をいかにせむ

夜灯

いづかたにそむけてか見むともし火の影さだまらぬ窓の小夜風

窓灯

草木にも音せぬ窓の小夜風もさながら見ゆるともし火のかげ

閑中灯

風の間いきえぬと見るもつれなきやひとりの影の宿のともしび

わが影をひとりと思ふよなよなに月も軒もるやどのともしび

窓灯

ともしびのうすき光やおのづから窓より西の月をみすらむ

寺近聞鐘

思ふにも尾の上の色に鐘の聲みるやさびしき聞くやかなしき

古寺鐘

よそに思ふほどはあらしの鐘の音（正イ）たへたる嶺もすむ身なりせば

佛寺

小泊瀬や遠ききこえも谷風の吹きのぼるうへの鐘にしられて

古寺鐘

大永六年  
内裏御屏風和歌

吹きのぼる谷かせみえて初瀬山ゆふべのかねに雲のかかれる

古寺松

かへる日を松の片枝のさしながら契りしままの道もかしこし

心すむあかつき月のたかの山いつをかさらに松風のこゑ

古寺路

松杉のかげゆく道にくるる日のなほ空高き嶺のふるでら

すむ人の佛の道を尋ねずばとふとも山のかひなかるべし

佛寺



かしこしな法のはじめの名をとめて難波の寺は末の世までに  
よの常（長）のふりゆく寺の佛のみかはらぬかぎりひかりそひつつ

林下幽閑氣味深

尋ねばや木の下住の身ひとつはなかなかほき道も知るらむ

隠士出山

山すみもしらるる世にや立ち歸り人にまぎれぬ身を隠すべき

山家

世をすつるたぐひにはあらぬ山賤のすみこし儘の道もはかなし

山家人稀

ひとすぢの苔の通路それとだに木の葉にたてる山すみも（ま）うし

山深みひとりびとりのかくれ家はしる人ながらとふ道もなし

山家橋

山ふかみ道なきままにうち渡す橋はいくつの岩木なるらむ

山家待人

世のうさにすめかし山は淋しさとふやと人を思ふのみかは  
遅れじといひしを暫し頼まずば閉ぢはてぬべき柴の戸ぼそを

山家

人もこそおくれじといひし山住にわれさきたちてあるじ顔なる  
思へ人心にふかき山ならばとはれても知るみちやなからむ  
おくれじの人をば思ひすててしを鳥獸にまたなれにける  
雲にとち嵐にひびく柴の戸をあるにまかせてかくれ家もなし  
おのづから山は岩かげ木隠にめぐりの垣も幾重なるらむ

山家鳥

柴の戸のうちに入りきてゐる鳥もあるにまかする暮ごとの空  
くるる夜は人をぞたのむ山里の軒端にやどる鳥のこゑを

山家夕嵐



山にてもよそのゆふべに聞くぞうき嵐にしづむいりあひの聲  
柴の戸のわが夕暮のおとづれにせめては松のあらしをぞきく

山家嵐

はげしさも人の心にみしよをや山はあらしに思ひいづらむ  
花紅葉こころにはらふ深山居を心あさくもとふあらしかな

山家苔

蔭たかき本草はいはじ山里は苔のしづくをはらひえぬまで

山家松

朝夕の煙もたてじ柴の庵まつの葉すきてあるにまかせば

村村煙細

山風やひとりびとりと住む里は煙の末もわかれてぞゆく

山家流水

みなせ川心とめけむ山水のあはれむかしをかへす世もがな

深山幽居

われながら心のおくはまだしらで深き山ともたのみけるかな

山家

心よりひとりびとりの山住はならぶ家居もしらずがほなる  
世の外と思ふばかりの山住にこころゆるさばかくれ家やなき  
かくてしも山は爪木のこりすまに世に求めある道をとふらむ  
ともすれば見ゆらむものを山深くすめるばかりに浅き心は

山家經年

山にても思なくては年もへじ捨てざりし世にかからましかば  
山住に身をやつしても身ぞ安き恥おほからむいのちながさの

山家燈

山深きあらしの窓にそむきても見しよかなしき燈火のもと

田里



心あれや田づらの里にすむ人もただにおくらむ春秋のそら

田家

いなば守る庵ひとつのうちなれや鹿のおきふし雲のたち居も  
秋までとおくる門田を出でていなば賤しき身にも心かろしや  
わかれ

したふとてたちわかれずばそれぞまづ心になふ命なるべき

羈旅

浪の上山路の露にぬれぬれすみやこのそらや袖しぼるらむ  
いそげなほわけ残す野の夕日影山路にかかるすゑぞくるしき

羈中衣

名残おもふ故郷いでしなみだとやわれから衣ほしもやられず  
身にしめて思ふ移香その儘にみけしは旅にやつれやはする  
わがわぶる山路の嵐せめてさは衣ふきほせしばしやすまむ

野旅

草枕宿はと間はむ鐘の音も末野のやまのおくにきこえて

旅宿嵐

山こえしけふの嵐をわびつつも松がねまくらたのむはかなさ

猿

山ふかみ猿の聲ふむ橋のうへは雲路をゆきてゆくすゑもなし

水邊旅宿

いかにねむせう一夜の床は山水のかたらふ聲も袖ぬらしつつ

旅行

旅衣涙よりおく露ならばいがら野山にはらふかひもあらしを  
友なくて旅にはゆかむかりそめも逢ふ人あれば別路もうし  
草枕ねられぬままにおきいでてこの朝露のあまり夜ぶかき

夕旅



ゆきゆきてなほ里みえぬ山かげの入相の鐘にまよふみちかな

野 旅

たちよるもかげなき野邊の庵ならばよし草枕いづくにもせむ

旅

草枕かげなき野邊にあかす夜をかくて見ずとはおもふ月かな  
心より袖にわすれむ雫かは野分の露はわけつくしても

鞆中秋

旅衣うつるともなき心にもさすが野山のあきのいろいろ

秋旅宿

知らじかしさぞな故郷露けさをひとつにはらふ草のまくらを

旅宿雨

今日越えし山路の末にみし雲のひと夜すぐさす雨となりぬる  
宿にきて濡れぬもうれし雨の脚のわれに後れて降りいづるよに

風破旅夢

知らず聞く一夜の夢にうらむなよ松がねまくら風のやどりを  
故郷もさこそ嵐のよるところかき寐にのみと夢はしたはじ

鞆中懷都

みし人を思ひあはするうつつもやうつつ山邊の夢ぞかなしき  
宿ごとの一夜のともも過ぎこしはみなふるさとの人に戀しき

旅 宿

戀ひわぶる故郷人のおもかげを旅寐のゆめにやつしてや見む

鞆中枕

草むすぶ枕もうきねわたつ海とあれにし床はふるさとの空

旅 宿

草枕むすべば結ぶ露をみて夢をいかにとしたひ侘びぬる

旅



草まくら野山の露のぬれぎぬよいはばやおのが涙なりけり

旅宿夢

草まくらおつる涙のかずかすもよろづの夢にまぎれやはする  
はかなしや草の枕にみる夢もみやこの誰れにかたりあはせむ  
草のまくらに

誰れとかは草の枕におもひねのはかなき夢もおもひあはせむ

羈中衣

都にとうつつに返す身ならばや夜のころもはちぎりなくとも

旅宿

草枕ゆふつけ鳥にこと問はむまちかき里のありやなしやと

旅宿月

あけば又おき出でむ宿の名残をもはかなや月に思ひおきける

寄月旅宿

草枕いぐよかの月におきいでて名残つゆけきそでもつれなし

寄月旅行

くれぬとて頼む一夜のやどりをまたさそはれて月にいでぬる

寄月旅

旅にしてへだてぬものか都にもみるらむ月のおなじ雲井に

寄月旅行

かひもなし月の雲井路みやこにとこまひきかへす心ばかりは

旅

こまとめて思ふもはかなし方に心ばかりはひきかへすとも

旅大永六年  
西裏御屏風和歌

旅にして忍草おふる故郷はすむらむよりはみだれてぞ思ふ

羈中送日

ゆくゆくも草木の色にうつりきてしらぬ野山の月日をぞしる



雁のゆく道におくれてふるさとにわれはいづれの春秋のそら

羈中渡

水無瀬川おもはぬ浦のわたし舟などよびかへす道なかりけむ

煙

やどりとふむろの八嶋は煙のみ里ありげにてとふ人もなし

旅人渡橋

大江山過ぎしいく野のなぐさめに日をわたるべき天の橋立

旅

露霜やまた浪風にしのばまし野山のはてのけふのふなぢに

海路

うつりゆく月日を思へかぎりなきもろこし舟の波路なりとも  
けふもまた沖つ白波末みえて夜のとまりを出づるふなびと  
雲井ぞとみしや生駒のほど近しおほ江に出づる舟のゆくすゑ

旅

もしほ草いざかきやらむこし方のたよりをかへす浪に任せて

旅路

うれしくも都のよるべつひにあれや立つ白波のかかきこ波路に

旅泊

白波のたつた路いかに大ともの御津のとまりのうきねながらに

水邊旅宿

舟の中にねぬ夜ともなし蘆のやは跡もまくらも波のうへにて

旅泊波

浦風もしづかなる夜をいかに寐てひとり袖こす波のまくらぞ

旅泊重夜

大永六年  
内裏御屏風和歌

波枕なれぬるままにねぬる夜のうらめづらしき夢のかよひ路  
梶枕袖こすなみも心よりほさでいくよの月をみつらむ



旅泊夢

いかにして草の枕の一夜にはよろづの事をゆめに見つらむ

泊雨滴蓬

あらし風こゆらむ波の雫より筈もるあめはうきねともなし

夢

知らずたれわれにもかして時のまの五十年の枕夢はみすらむ

春秋の花にさながら馴れてみむ胡蝶の夢に身をわすれても

憂喜間夢

いでやそのありのすさみにみし夢もはては歎の陰のかりふし

往事如夢

春とすぎ秋とうつりて年年の夢はさすがに見はてぬもうし

みもはてぬ夢のうちにてうつる世のいつを昔と驚かれけむ

親

初風の秋ぞみにしむともしびの窓にそむけぬ心すすめて

逐日述懐

暮れがたき夏のいく日もあたら夜の窓の螢の影もしらすて

述懐

さまざまの道のひとつの境をもふみみぬ身こそまづ苦しけれ

人はみなうつる月日もおどろかて老が身ひとり年ぞくれぬる

をさめしむるわが世いかにと波風の八十島かけてゆく心かな

いづくとか身をばすつらむ道もなきわが世をそむく人の心に

述懐多

大永六年  
内裏御屏風和歌

世をうらみあるはわが身をうしと思ひ人にいつかは心休めむ

述懐

世の中よわが心から道もなし人にしるべはありもあらずも

たちかへり羨ましきは末の世にあへるを道と思ふのみなる



わが世をばなきになしても思ふらむ人ぞおもひの人にくるしき  
波のうへ野山の末におもふなよ道とは人のこころなりけり  
おのが世に思ひなりぬる時やこれ上もめぐまず下もなびかず

寄名所述懷

雲の上にすむ身やなにの位山したには残すみちもこそあれ

寄名所述懷

大永六年  
内裏御屏風和歌

世の中よ夢路に過ぎてうつつの山ゆくさきしらぬ物をこそ思へ

寄雲述懷

いかにせば月日をおなじ心にて雲の上より世をてらさまし

寄情述懷

いかにいはむあはれも知らぬ心には霞をへだて露をはらひて

寄涙述懷

われからのなみだよ何を思ふらむ藻にすむ蟲は波もかけけり

寄身述懷

賤しきもわれに勝りて送る日をなす業なくば身をいかにせむ

獨述懷

うきこともよしや暫しと身をやすく思ひなすべき老はきにけり

舊

道は猶ふりぬる人に残してぞあらたまる世のしるべともせむ

披書逢昔

忍ぶらむ昔のふみよ何事のありきあらずみめのまへにして

懷 舊

あぢきなく世を思ふゆるの言の葉は思はぬもののおなじ心を  
人ごとの昔がたりは高砂の松のひと木にいふかひもなし

獨懷舊

思ひいでて忘れぬふしはかはるとも人も昔をしのばざらめや



寄月懷舊

ともすればわが袖ひとつ長月の時雨にちかきかげぞくもれる  
月やしることしの秋をいくとせとことをあまたに忍ぶ涙は  
雲の上にすむかひあれや月ひとり代代の昔のひかりかはらで

對月懷舊

月やしるおのが世世なる思出をはるかに忍びちかく戀ひつつ

寄水懷舊

水もそのにこらばといひすめらばと思ふも人の世にぞ従ふ

寄夢懷舊

年年にみるもやむかし春秋の花も一時のゆめをしたひて

寄老懷舊

よそにみし昔も遠しこひしわが上の年をことしは身の上こしはにことしは老をかぞへはじめて

寄世懷舊

われのみやその世ばかりの面影もふるきにしたふ百敷のうち

往事渺茫

こしかたもかくや見えましとどまらぬ光の影も久かたの空

寄月無常

有りとみて見るや世の常手に結ぶ水にさながら月をやどして

對鏡知身老

そらにみる月日もつひにます鏡ここにうつりて老となりぬる

少

残るをや身におどろかむ落髮のけづればつもる數はそへつつ

胸消是非

ことわりはひとつ心のねざしかなこの手柏のともかくにも

五

さまざまのかたちは物をかりの身の心ひとつぞ數の外なる



釋教

時ありてわが世を照すしるしをば夢にもみねばみつの燈火  
かくて身の心のこらぬ境をばいかにへだてていかにたづねむ  
あはれ身の佛も人に身をかへておもひの家の世をやくるしむ

大日

中空に照す時こそはじめなくをはりなき身のひかりなりけれ

偷盜戒

花と見て一つ草をも手折るなよあらぬかざしの名にもこそたて

寄水釋教

うかみいづる世をばしらすて幾度か水の白波たちかへるらむ

神祇

ますかがみ影のうちにも忘るなよ心をてらす神にむかひて  
深くたのみ高くあふがむ神とてや海も麓のあとをたれけむ

仰げなほ月日のうへのみす鏡かたちなきしも神のこころを

いせ

うけつぎて今はわが世をわたらへやいすずの河のたえぬ流に

石清水明應年中

世にひろきちかひとならば石清水わが人ならぬ人もへだてじ

神社

さらにこの冬の祭やちはやぶる賀茂にいろそふ松のここの葉

春日

春にあけて山は朝日のうちのぼる佐保の河風こほりとくらむ

住吉

住吉やふりゆく松のかけまくもゆきあひの間の霜はみせけり

寄月神祇

住吉や月もあらはれいづる夜はあはしが原の影もくもらで



寄煙神祇

ともしびの一夜の影に百年のやみはあやなきものとなりぬる

寄花神祇

をさまれる風をこころの神垣にちらぬためしの花もさかなむ

社頭神

松もいさいくたび霜にあらはれて神代おぼゆる榊葉のかげ

寄榊神祇

神わざや聲のうちにも榊葉の末葉もとつ葉しげりあふまで

寄鏡神祇

身に近き神のまもりのうれしさは鏡のかげの手にもとるまで

春神祇

石清水その神わざのそのかみにいまだにかへせ袖のははるつかせ

毎家有春

波風をさらにをさめて四方の海も皆わが家の春ぞかしこき

祝言

何の道もかくこそは見め言の葉のまさきの葛ながきためしに  
はるかなる天の浮橋絶えせじの世のことわざやことの葉の道  
われになほ仰ぎてぞみむ人ごとの心のみちにをさむべき世を  
言の葉の末もたがはずいにしへのおどろが下の道ひろき世に  
祝

をさめしるとき世はふみにやはらぐも弓にたけきも同じ心は

砌松

いくかへり龜の上なる山松の木だかきかげに千世をならべむ

松歴年 永正十七年正月

松のうへに千とせもあかじふかみどり世世のときはを花の春風

松添築色 大永三年正月



花とみむ色香も松にふかみどりときはの蔭のよよのはるかせ  
いくとせをふるえの松の若みどりまた立ちかへる春や重ねむ

松影浮水 永正十四年正月

そこひなき水の緑もなみたてる松にいく世のはるのはつかせ

竹不改色 文龜二年正月

萬代のこゑの色をやそよさらに竹にまちとる春のはつかせ

竹爲師 永正十二年正月

わがみても葉がへぬ色に契りおかむ臺の竹の代代のためしを

寄若菜祝言

わかなつむ都の野邊も松の雪いく世つもれる年とかはしる

寄花祝言

春ごとにそめいだす花や君に今なほ千世までも見ゆる色かな

鶴有遐齡

千年とはおのが世世にやよばふらむ松ふく風につるのもろ聲

鶴遐年友

のどかなる世は春風にうちはぶき鶴の毛ごろも霜やへぬらむ

寄鶴祝

花になき水にすむてふもろごゑに契りかおきし和歌のうら鶴

鶴全千年 大永六年  
内皇御屏風和歌

もろ人の千年のよはひかさねてや鶴の毛衣世におほふらむ

鶴伴仙齡

仙人のおなじよはひを重ねきてたちぬはぬきぬやつるの毛衣

龜萬年友

よろづ代をかはらぬ道に尋ねみむ龜のうへなるやまと言の葉

水歴幾年 永正十一年正月

池水のこほりも波もいくがへり年は春なるうぐひすのこゑ



岩根ゆく瀧のひびきや龜の尾の山よりよばふよろづ代のこゑ

寄神祇祝

見るままに筆もとりあへず手向山この言の葉も神のまにまにあつめおきてみまくのほしき百種のねがひもみちぬ玉津嶋姫

社頭祝言

上下と人にみだれぬ道までもわが世にまもれ賀茂のみづ垣

寄世祝

をさまれる世の聲にせむ絲竹のみだれむとする道をただして空に知れ千年へぬべきたのしみを思ふわが世は人の世のため

御製集 第五卷終

(岡田三郎助意匠) (御製本)

御製集 第五卷

〔非賣品〕

大正四年十一月十日印刷  
大正四年十一月十三日發行

版 權 所 有



編纂者兼

列聖全集編纂會

東京市麴町區内幸町一丁目三番地

右代表者

中塚榮次郎

東京市赤坂區青山高樹町十二番地

印刷者

井上源之丞

東京市本所區番場町四番地

印刷所

出版印刷株式會社本所分工場  
東京市本所區番場町四番地

發行所

電話新橋一三二七番  
振替東京二九八八番

列聖全集編纂會



328  
378



終